

Community Language Learning の 理論に基づく教室活動

横 溝 紳 一 郎

1. はじめに

外国語教育の分野に限らず、教師にはよりどころとなる教育方針／理論／哲学が必要である。北原（2010）は教育方針／理論／哲学を「幹」と呼び、その大切さを主張している。

研修会で学んだ指導をさっそく自分でやってみる – でもうまくいかない。それは、きれいな花を見つけて持ち帰って。無理やりあなたの庭に植えても枯れてしまうのと似ている。授業をやっていて不安がある。毎年、同じところでつまずいてしまう。それは授業の「幹」がしっかりしていないからだ。枝を均等に伸ばして、生徒がどこに立っても頭の上には葉が生い茂っているようにしたい。そのためには、まず自分の「幹」を作ることが大切だ。「幹」がないから揺らぐのだ。「幹」がしっかりしていれば、花が咲き、実がなる。

私にとっての「幹」は、Community Language Learningである。2021年4月に着任した母校、西南学院大学で久しぶりに英語の授業を担当することになった私は、CLLの教育理論に立ち返り、試行錯誤を繰り返しながら授業をデザイン・運営した。本論文は、その試行錯誤プロセスについての実践報告である。

2. Community Language Learning

Community Language Learning（以下、CLL）は、臨床心理学者であるカール・ロジャーズ（Carl Rogers）の教育観に影響を受け、カウンセリングの理論と手法を取り入れた外国語教授法である。以下、横溝（1995）に基づき、CLLの基本理念、歴史的背景、教育理論を紹介していく。

2.1 CLLの基本理念

学習は認知面すなわち記憶や知性だけで成立しているものではなく、情意面すなわち学習者の感情や心理状態も学習効果に大きな影響を与えている。学習中に学習者の心の中に不安や恐怖が存在していると、学習自体が妨げられてしまい効果的な学習が期待できない。それ故、学習の妨げとなっている不安や恐怖を最小限にし、学習を効果的にすることが重要である。そのひとつの手段として、カウンセリングの活用が考えられる。カウンセリングの活用を通して、認知と情意の両面での、全人格的な（Whole-Person）学習の促進が期待できる。

2.2 CLLの歴史的背景

学習効果を上げるためにカウンセリングを活用する試みは、1960年代後半から1970年代にかけて、シカゴ大学のCharles A. Curranによって行われ、カウンセリング・ラーニング（C-L）と名付けられた。神学者であり心理学者でもあったCurranは、学習者の人間性を重視し、カウンセリング治療を学習に応用した。また、Curranは、カウンセリングを個人教育だけでなく、グループ教育に適用できると主張した。その際、教師はカウンセラーの役割を果たし、学習者は患者のグループを形成する。C-Lを外国語教育に適用したものがCLLである。

2.3 CLLの教育理論

2.3.1 コミュニティと契約（Community and Contract）

心理的圧迫・不安・恐怖を最小限にするために、CLLにはコミュニティ（共同体）の存在が必要不可欠である。コミュニティの中では、各学習者の役割・

貢献が自覚され、学習者同士の交流が促進されるのであるが、そのコミュニティを創るのに必要不可欠なものが契約 (contract) である。契約とは、ある集団の中の個人一人一人が、その集団の目標を達成するために所有している統一された決まりのようなものである。コミュニティが契約に基づくものであれば、コミュニティのメンバーは自意識に目覚め、目標達成のための責任を感じるようになる。つまり、ある集団が、全員である目標を達成しようと決心し、そのための総意の決まり (契約) を設ければ、その集団のメンバー一人一人は目標達成のために自分は何をしたらいいかを自覚し、それに対する責任を自分自身が負っているという意識が生じるという理論である。このようなコミュニティが形成されれば、各学習者の心理的圧迫・不安・恐怖は必然的に最小限に減らすことが可能であり、それが効果的な学習につながると考えられている。

2.3.2 ふり返り (Reflection)

ふり返り (reflection) も CLL には必要不可欠である。契約によってコミュニティが形成されたとしても、時間の経過にともない自意識や責任感が減少する可能性がある。それ故、授業で学習者自身が行ったことやその行為の心理的要因を学習者一人一人にふり返らせることにより、契約を守ってそれに従って授業時間を過ごしたかどうかを確認するのである。ふり返りは基本的には学習者個人が自分の学習プロセスを確認するためのものであるが、各個人のふり返りをクラス全体に公表することもある。これにより学習者は他の学習者も同じ気持を共有していることを知り、それが安心感につながる。また、ふり返りを通して自分の学習プロセスそして各教室活動の内容をより意識的に認識するので、各学習者は目標言語を学ぶだけでなく、目標言語の学び方を学ぶ (learn how to learn) ようになる。

2.3.3 SARD (非防衛的学習に必要な要因)

学習者の防衛的学習を避け、非防衛的学習態度を可能にする要因として Curran は、Security (安心感)、Attention (注意力)、Aggression (積極性)、Retention (定着)、Reflection (ふり返り)、Discrimination (識別) の6つを挙

げた。「安心感」が存在する環境では、学習者は学習に対する自らの責任に「注目」するようになり、そしてより「積極的」な学習が生じる。積極的な学習によって学習したものは自然に「定着」していく。この定着は自らの学習プロセスや学習項目を「ふり返る」ことにより助成される。以上のプロセスを繰り返していくことにより、学習者は自らが学習したものとそうでないものを「識別」できるようになっていく。以上の SARD6 つの要因すべてが CLL の中に含まれている。

2.3.4 成長の5段階

CLL では目標言語における学習者の成長を5段階に分けて捉えている。その5段階とは次の通りである。

第1段階：胎児期 (Embryonic Stage)

完全に教師に依存していて、教師の存在無しには目標言語が話せない。

第2段階：自己主張期 (Self-assertion Stage)

少しずつ自信が付き単純な文を自分で使い始めるが、教師への依存が依然として存在する。

第3段階：別個存在期 (Separate-existence Stage)

自分達だけで目標言語のみを使い会話することを望み、教師の干渉や助力を拒否する。

第4段階：役割転換期 (Reversal Stage)

教師とは独立して機能するが、教師の知識に依存しなければそれ以上の上達が困難であると認識し、教師の助力を自ら働きかけて積極的に受け入れる。また、より積極的な参画が、確認行為や教師への協力という形で表われる。

第5段階：独立期 (Independent Stage)

教師から完全に独立し自由にコミュニケーションできるが、微妙な言語面での洗練や手直しが必要とされる場合がある。

学習者がどの段階にいるかによって、教師は自らの果たす役割を決定しなければならない。すなわち、胎児期では教師は学習者が目標言語で発話できるように全面的に面倒をみるのであるが、自己主張期になると、援助の要請を待った上で学習者の学習を支えるべきである。別個存在期では、学習者は自分達だけで目標言語を使う喜びを感じているので、教師は学習者とある程度の距離を保ち自分から干渉したいという気持ちを抑える忍耐力が必要とされる。役割転換期では、学習者は教師の訂正を望み受け入れる心理状態にあるので、学習者の安心感を損なわないように心掛けながら、学習者の要請に応じて学習を支える。また、学習者からの確認や協力があつた場合は、それを受け入れ、授業に活かしていく。独立期では、高いレベルで適切な表現ができるように学習者を指導することが、教師に期待されている。

2.3.5 学習者の空間

目標言語の学習が行われる時、教師と学習者の間には目標言語における知識の大きな差が存在している。教師が自分の持つ知識を学習者に無理に詰め込もうとすると、学習者の学習そのものが防衛的になってしまい効果が上がらない。反対に、自ら積極的に教師の知識を吸収し自分自身の知識を拡げていく場合には、学習者は安心感を抱くことができるので、学習項目の定着もより促進されると考えられる。

2.4 CLL と私の関わり

ハワイ大学大学院在学中に、日本語教授法の授業で紹介された CLL にとても興味を持った。「CLL を実践して修士論文を書きたい」と主査・副査の先生方に伝えたところ、「面白いアイデアだけど、お前は CLL で授業ができるのか?」と聞かれたので、「今はできません。でも、できるようになります!」と回答した。それから、アメリカ国内の CLL 実践者や研究機関に問い合わせたのだが、CLL の教員養成・研修は行われていないとのことであった。絶望的な気持ちになりかけた時に、名古屋の南山短期大学の Paul LaForge 教授が CLL の教育・研究をしてなさっていることを知り、「CLL について、理論・実践方法の両方

を学び、CLLで授業ができるようになりたいです。弟子にしてください。」とご本人に手紙でお願いしたところ、ご快諾くださった。3週間ほど、LaForge教授が寮長をしていた寮に滞在し、お昼は授業見学、夜は理論・実践方法についての質疑応答をさせていただいた。

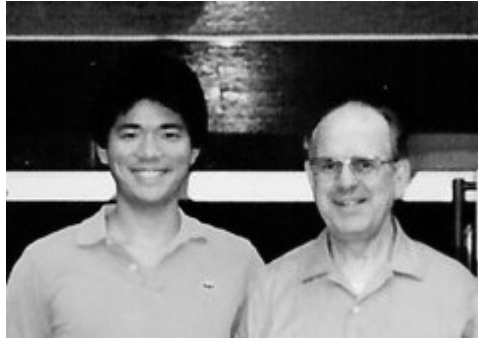


図1 LaForge教授と私(1987年夏)

その後ハワイに戻り、CLLで一学期間、中級レベルの学習者に日本語を教えながらデータを収集し、何とか修士論文(Yokomizo 1988)を書き上げることができた。

修士課程修了後に日本語教師として仕事をしていく中で、「CLLだけでは授業はできない」ことに気づき、アメリカにおける日本語教授法の一大勢力であるJordan Methodの実践者である先生方と教育・研究を行ったり、他の教授法の理論と実践方法を学んだりしながら、自分自身の日本語授業力が高まるように努力を続けてきた。しかしながら、その一方で、一番最初にしっかりと学んだ教授法であるCLLの影響は大きく、CLLの教育理論に基づく授業の工夫は、現在に至るまでずっと続いている。

1997年の春ハワイ大学大学院のESLの授業を履修していた時に、CLLの理論について英語で説明をし、その具体的教室活動を紹介する発表機会に恵まれた。発表後の質疑応答の後で、授業担当のCrookes先生から、興味深いコメントをいただいた。それは、「おもしろいですね、紳さんの中で

の CLL って。『CLL の理論に基づけば、こんな教室活動もこんな授業もできますよ!』って捉えてるんですね。」というものであった。『日本語教授法ワークショップ』の本の中で CLL の様々な教室活動が紹介されているのは、そのためであり、またその方向性は、CLL における私の師匠である LaForge 先生の影響を受けたものである。(横溝 2006 : 19-20)

今回の英語の授業のデザイン・運営の工夫は、この延長線上の試行錯誤である。

3. 授業デザインと運営

3.1 達成目標の設定

本実践のデザイン・運営方法を考えるにあたって、まずは「達成目標としてどのような力をつけるのか」を明らかにすべきだと考え、その理論的枠組みとして、當作靖彦氏による「ソーシャルネットワーキングアプローチ (Social Networking Approach, 以下 SNA) を採用することとした。當作 (2017 : 5) は、SNA について「21 世紀の社会が要求する人間を言語教育を通して育成する新しい言語教育のアプローチである」としている。SNA の成立過程について、横溝 (2021 : 82) は、以下の図でまとめている。

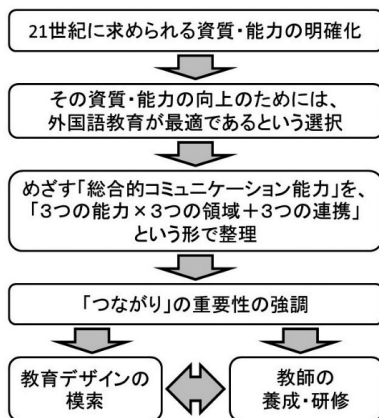


図2 SNA の成立過程

21 世紀に求められる資質・能力は数多く存在しており、そのどれに焦点を当てるかによって授業デザインも大きな影響を受けるのであるが、今回の実践では「つながる能力」に焦点を当てることとした。その理由は、2020 年 2 月 22 日の西南学院大学での當作氏による講演にさかのぼる。講演の中で當作氏は、以下のように述べている。

「つながり」の内容が大きく変わってきています。20 世紀までは、つながる相手が家族や友だちや同僚などの限定的な人々でした。これが 21 世紀になると、ツイッターやフェイスブックの例でも分かるとおおり、つながる相手は限定的ではなくなり、知らない人とつながることも当たり前になっています。こんな世の中ですから、多様な人々とつながる能力、そして多様な文化とつながる能力が必要不可欠になるんです。こういった能力を伸ばすのは、まさに外国語の授業なんです。

このお話を伺った時に、真っ先に思いついたのが「よく知っている人同士では、いつまでも話し続けることができるのに、あまり知らない人に対しては話しかけることすらできずにいる学生」や「あまり知らない人とは、会話がうまく継続できない学生」の存在だった。私自身は「日本語でうまくできないことは、外国語でもうまくできない」と考えているので、学生たちの「英語を使って、つながる能力」は高くないと予想した。これらのことから、本実践の達成目標を「英語を使って、多様な人々とつながる能力を伸ばすこと」と設定した。

3.2 教室活動

上掲の目標を達成するために、様々な試行錯誤を行ったのだが、本論文では特に、CLL の理論の応用である「1 分間トーク」と「Padlet によるふり返り活動」を紹介する。

3.2.1 1 分間トーク

多様な人々とつながる能力を伸ばすためには、できるだけたくさんの人とコ

コミュニケーションをする場が必要である。どのような教室活動がいいか考えていた時に、私自身がサンディエゴ州立大学に交換留学した時に行っていた「その日のうちに日記を書く⇒翌日、日記で書いた内容を人に話す」サイクルを思い出した。英語力が圧倒的に不足していた私は、まずは「書くこと」を日常化しようとして、毎日日記をつけていた。

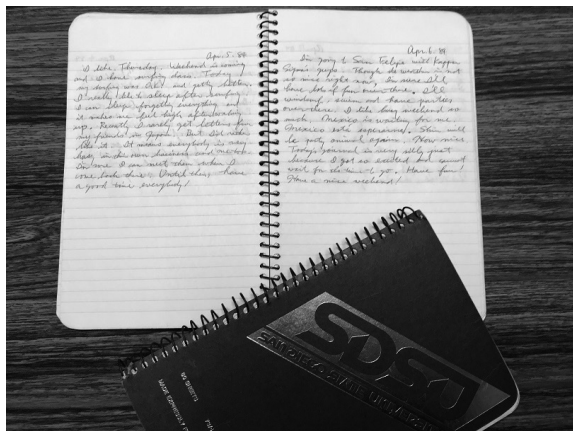


図3 サンディエゴ留学中の日記

ある日、日記に書いた内容をたまたま友達に話してみると、いつもよりもずっとスムーズにうまくコミュニケーションを取ることができた。「この方法なら、人に話しかけて話を継続できる」と思った私は、書いた日記の内容をある程度覚えて、翌日3人以上の友人に話すことにした。この方法の採用によって、留学中に自分自身のコミュニケーション力を伸ばすことができた。この方法を今回の英語の授業に応用できないか考えたのである。

では、どう授業に組み入れればよいのだろうか。そこで思いついたのが、CLLで修士論文を書いていた頃に行っていたPair Group Conversationだった。同活動について、横溝（1996：90）は以下のように述べている。

1. クラス全体を2列に並ばせ、1対1のペアを作り、向かい合うように座らせる。クラス全体の学習者数が奇数で、1人ペアを作れず余る場合は、

- 3人のグループを1つ1番端に作らせる。
2. 教師は、向かい合って座っているペア同士で会話を行うように指示し、制限時間（通常3分）を与える。
 3. 教師は、学習者が語彙や文型に関して助言を求めた時に助けられるように、ゆっくりと学習者の背後を歩きながら、全体に注意を配る。
 4. 制限時間になったら、教師は会話の終了を伝え、学習者全員を立ち上がらせ、1席、左にずれるように指示し、移動が完了したら着席させ、新しく3分間の会話を行うように伝える。
 5. 2～4のプロセスを繰り返し、教師は自分で決定した回数（通常3回）だけ会話が行われた後、この教室活動の終了を宣言する。



図4 Pair Group Conversation

今回の実践では、以下のようなアレンジを加えた。

1. 3名のグループは作らず、1人余った学生のペア役は、担当教員が務める。
2. 制限時間は1分とする。（時間はタイマーで掲示）
3. 1人が1分間話しているときは、もう1人は聞き役に徹する。1分経ったら、話し手と聞き役の役割を交代し、1分トークを再開する。
4. 教師の支援は行わない。

アレンジ2であるが、話し続ける限界がおそらく1分程度であろうと推測したためである。アレンジ3を行った理由は、どの学生にも平等な発言時間を与えるためである。アレンジ4の理由は、「うまく言えないことが出てきても、自分が知っている英語で何とかしよう」という態度を涵養するため、そして「これって、どう言えばいいんだろう」と感じることで積極的な調べ学習者が生じることを期待したから、である。そして、CLLの「成長の5段階」理論の第3段階を創出したかったからである。



図5 1分間トークを行う学生たち

3.2.2 Padletによる振り返り活動

Padletによる振り返り活動は、CLLの「振り返り」理論によるものである。CLLでの振り返りは通常、「各学習者が自分の振り返りを記述し、担当教員がそれを読む」という形式で行われるのであるが、今回の実践では、「各学生が『授業での学び』を、授業後3日以内に、100語以上の英語でPadlet掲示板に提出する」という形式を採用した。Padlet掲示板を使用したのは、各学生の学びが全て掲示板に載るため、学生同士でお互いの英文を読み合うだろうと予想したからである。「自分が書いた英作文が他の学生にも読まれる」という状況を作り出し、学生の責任感がより増すことだけでなく、「〇〇さんはこんなことを学んだんだ」という情報の共有が進み、学生間のつながりが広がり深まることを期待したのである。

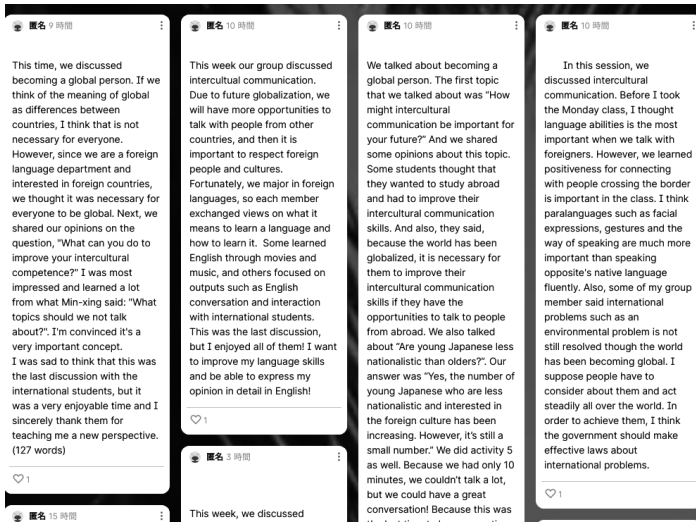


図6 Padlet に提出された学生のふり返り

ふり返りとして Padlet 掲示板に提出する内容は、「その日の授業での『学び』」なのであるが、「学び」をどう捉えるかは様々なので、前田（2016：22）の以下の定義を、最初の授業で紹介することとした。

「学ぶ」とは、「何かに気づき、自分が変わること」

その上で、「『気づき』によって変わるのは、『意識』『態度』『言動』です」と付け加えた。

4. アンケート調査の結果と考察

4.1 アンケート調査の内容

上記の英語授業の成果と課題を知るために、学期末の15回目の対面式授業で、学生に対してアンケート調査を実施した（受講生27名中27名が回答，回答率＝100%）。アンケート用紙は、7段階評価と自由記述の2部構成とした。7段階は、以下のように設定した。

- 初めは全然ことばが出て来なくて、話すのが大変でしたが、回を重ねるうちに以前より自然とことばが出てくるようになりました。
- 話題を考えて、それを英語で表現することは難しかったけど、自分の能力の向上につながったように感じる事ができたし、すごく楽しかったです。
- 英語がとっさに出てくるようになったのでよかったです。
- ミスを恐れず話せるようになった気がします！

その一方で、以下のようなコメントも見られた。

- 何かイベントがあったら話すこともたくさんあって話せたけど、何もなかった時に1分間話し続けるのは、とても長く感じた。
- 会話も難しかったけど、話題を探すことが一番難しかったです。
- 自分の話がちゃんと伝わっているのかが不安だった。

4.2.2 Padlet によるふり返し活動について

楽しさ／難しさ／役立ち度は、以下の結果となった。

表2 Padlet によるふり返し活動の楽しさ／難しさ／役立ち度

楽しさ							難しさ							役立ち度						
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
0	0	5	9	6	6	1	0	1	0	4	17	5	0	0	0	0	0	5	7	15

難しさに関しては、個人差が大きい。楽しさに関しても、非常に肯定的な学生もいればそうでない学生も存在している。その一方で、「役に立つ」に関しては、肯定的な意見が多い。この質問に関しては、以下のような自由記述がみられた。

- 自分の考えを英文化するのは簡単ではなく、心の底から楽しい！というわけではありませんでした。学びをふり返る時間をしっかり確保することで、自分の今までの経験を思い出して照らし合わせてみたり、これからの目標ややりたいことが見え、少しずつ自分の中の意識が変わっていくのが分かりました。
- 100語は少なそうに見えて意外と量があったので、最初の方は少し難しかったです。だんだんと慣れていくうちに、自分が授業を通して考えたこと等をすらすら書けるようになったので良かったです。
- 授業を受けたら何日後には忘れてしまうけど、一度振り返ると、より記憶に残るので良いと思いました。

その一方で、以下のようなコメントも見られた。

- Moodle に提出期限の通知が来ないので、何度も忘れてしまいました。
- Padlet に感想を書くのと、Moodle 上に書くことの違いは何ですか。
- Padlet に入力した文字が誤タッチで消滅する事件が多発し、何度泣かされたことか定かではない。

4.2.3 クラスメイトとのつながりについて

クラスメイトとのつながりの広がり／深まりは、以下の結果となった。

表3 クラスメイトとのつながりの広がり／深まり

広がり						
1	2	3	4	5	6	7
0	0	0	0	5	7	15

深まり						
1	2	3	4	5	6	7
0	0	0	2	4	11	10

広がり・深まりともに、満足感を持っていたようである。この質問に関しては、以下のような自由記述がみられた。

- 人見知りなので不安でしたが、みんなが積極的に話しかけてくれたおかげで、自分からも話しかけてみようという意識が芽生え、仲良くなれました。自分と違う考えをする人の話を聴くのが楽しかったです。
- クラスメイトと話す機会が多くて楽しかったです。仲良くなるきっかけにもなりましたし、自分と違う考えをする人の話を聴くのが楽しかったです。
- 席替えの制度がよかったと思います。もう少し席替えの頻度を増やしてもいいかも。

ネガティブなコメントはひとつも見られなかった。

5. 調査結果に関する考察と今後について

本実践の到達目標は、「英語を使って、多様な人々とつながる能力を伸ばす」ことであり、CLLの理論を応用した「1分間トーク」と「Padletによるふり返り」は、その方法として採用されたものであった。上記のアンケート調査の結果を踏まえると、これらの目標は「かなり達成できたのではないかと結論づけられそうである。

しかし、一つの課題が浮上してきた。それは、スピーキング／ライティングに関して「間違いを恐れず、自分の思いや考えを声に出す」ことには抵抗がなくなった一方で、「誤り」が頻出するようになったことである。その「誤り」に対するトリートメントをどうするかが悩ましく思えたのである。この悩みの解決方法を考えている中で、CLLの「成長の5段階」理論を思い出した。成長の3～4段階は以下のとおりである（横溝 1996：84）。

3. 自分たちだけで目標言語のみを使い会話することを望み、教師の干渉や助力を拒否する。
4. 学習者は自立しているが、教師と自分たちの間の知識の差は十分に認識していて、批判を受けたり訂正されたりすることに反発したりすることはない。

「今回の実践で『話すことに抵抗がなくなり、誤りを気にせず話している』という学生たちの状態は、成長の第3段階にいる証拠なのだ」と考えると、CLLの理論上は当たり前で自然な状態と捉えられる。そして、その状態に満足できなかった学生は、自然と次の「教師の訂正（トリートメント）を積極的に快く受け入れる状態」へと移行するはずである。この考えの妥当性は、学生たちの今後の変容を追調査することにより明らかにできるのだが、同じ学生たちを実際に教える機会に恵まれることは、残念ながら今後はないであろう。

以前、私は「CLLの理論の応用」の可能性について、以下のように述べたことがある。

「CLLの理論の応用」については、大きな可能性があるように思われる。Curran教授が提唱したCLLの様々な理論は、現在でも、「学習者にとっての『学び』のあるべき姿」そして、それを支援する「教師のあるべき姿」に関する理論的枠組みを提供し続けている。この「あるべき姿」について、教育現場に立つ教師は常に自問自答し続けるべきであり、その継続こそが教師としての成長につながると、私自身は考えている。CLLを教育哲学のバックボーンとして持っていることを誇りにして、今後も研究・実践を続けていきたいと思う。（横溝 2006：22）

本実践を通して、この思いがさらに強くなった。今後も「教師のあるべき姿」について自問自答を繰り返しながら、教師／教師教育者として成長し続けたいと思う。

[参考文献]

- 北原延晃 (2010)『英語授業の「幹」をつくる本 上巻』ベネッセコーポレーション
- 前田康裕 (2016)『マンガで知る教師の学び これからの学校教育を担うために』さくら社
- 當作靖彦 (2017)「グローバル時代の『つながる』言語教育－ソーシャルネットワーキングアプローチ：理論と実践」『ソーシャルネットワーキングアプローチと日本語教育研究発表会報告論集』平成 27 年度～ 29 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 15K02662, 研究代表者=清水秀子), pp.5-16.
- 横溝紳一郎 (1995)「Community Language Learning (CLL) (コミュニティ・ランゲージ・ラーニング)」田崎清忠編『現代英語教授法総覧』大修館書店, pp.105-115
- 横溝紳一郎 (1996)「CL/CLL (コミュニティ・ランゲージ・ラーニング)」鎌田修・川口義一・鈴木睦編著『日本語教授法ワークショップ』凡人社, pp.82-103.
- 横溝紳一郎 (2006)「TEN YEARS AFTER: CL/CLL (コミュニティ・ランゲージ・ラーニング)」鎌田修・川口義一・鈴木睦編著『日本語教授法ワークショップ DVD』凡人社, pp.19-22.
- 横溝紳一郎 (2021)「外国語教育におけるソーシャルネットワーキングアプローチ」『西南女学院大学紀要』Vol.25, pp.75-84.
- Yokomizo, Shinichiro (1988) *Community Language Learning in the Japanese Language Curriculum: A Case Study*. ハワイ大学大学院東アジア言語文学科修士論文